

大谷一良著 『心象の山々』

人品骨柄生まれながらにして粗野、育った環境も凡そ形而上の世界とは程遠い田舎の水呑百姓の倅である小生はゲイジツの方面には全く感性が無い。学校の頃は音楽や図工の時間は一番後ろで小さくなって隠れていた。

会社に入ってリタイアするまで営業を担当したが、当時の営業はターゲットの人物の趣味を調べてまずはその方面の話から入れと教えられた。帝国年鑑などに趣味はクラシック音楽鑑賞などと記されていると、音楽音痴の小生には初っ端から歯が立たなかった。

絵画についても同様で、小生の郷里の岡山県には大原美術館があり、倉敷紡績（現クラボウ）の創設者である大原孫三郎が蒐集した古今東西の名画が展示されていて、今でも郷里への来客を案内する折があるが、入館してもものの10分もすればアクビが出てきてお客さんに大変な失礼をすることになるのがオチである。まあ、そのような体たらくではあるが、版画はわりと好きで棟方志巧の板画冊などはよく観る。

前置きが長くなった。登山家でもあり、また「アルプ同人」でもあった著者は商社勤めを退職後フリーの版画家となって山の風景や自然の心象を独特の筆致で刻んでいる。「アルプ」創刊号の表紙を飾っているのも著者の版画であった。「アルプ」創刊は50年も前のことで、当時から仕事の合間に版画を彫っておられたたのであろう。爾来、著者の版画やカットは「アルプ」を初め雑誌「山と溪谷」、「岳人」などを飾ってきた。これらの読者はユニークな版画を記憶しておられるであろう。

この本は、10年ほど前の「岳人」の表紙を2年間に亘って飾った山の版画を中心に編まれたものである。山巔や山麓や谷や草原や湿原などの山岳風景、またそれらを取り巻く天地風水が抽象化されて配置されてはいるが、全くの抽象画ではなく、全体として詩情溢れる山の風景を醸し出しており、そのためか具象画よりも一層彫が深く感ぜられる。「登山とは溪あり、岩あり、氷雪あり、なだらかな尾根歩きや草原での憩いあり」というような種々のタイプが複合されて初めて山登りという営為の環が完結するというのが小生の登山のスタンスであるが、これらの版画はそのような小宇宙を見事に描き出しているように思われる。「アルプ」同人だった尾崎喜八、畦地梅太郎や深田久弥などの回想記も興味深い。

2000年、恒文社刊。



(2007年元旦 記)

[「山書の小溪」目次に戻る](#)